

## ローマ人への手紙5章12-21節 「一人の人によって」

### 1A 死の支配 12-14

1B 罪による死 12

2B 律法より前の死 13-14

### 2A キリストの雛型 15-21

1B 違う点 15-17

1C 違反と賜物 15

2C 不義と義認 16

3C 死といのち 17

2B 同様の点 18-19

1C 一人の行為 18

2C 多くの人 19

### 3A 増し加わり 20-21

1B 罪に対する恵み 20

2B 死に対する命 21

## 本文

ローマ人への手紙5章を開いてください、私たちの聖書通読の学びは5章前半まで来ています。前回は 11 節まで見てきました。今朝は 12 節から一節ずつ学んでいきます。5 章後半は、とても難解な箇所と言われています。けれどもここを理解すれば、その後、6 章以降にある「キリストにある勝利」「福音の勝利」を見ていくことができます。

私たちは、「失望に終わるこのとない希望」(5:5 参照)について 5 章前半で見てきました。信仰によって義と認められた者たちは、神との平和があり、神の栄光にあずかる望みがあります。そして、キリストが罪人のために死なれるほど神の愛は深いのですから、キリストの血によって義と認められた私たちが、キリストが来られる時に神の怒りから救われないわけがない、と断言しました。これはすばらしい福音ですね。

そこでパウロは、さらにその恵みの福音のすばらしさを補強していきます。踏み固めて、ここまでか！というばかりに強めていきます。私たち人間にとって、現実的な脅威があります。そんなこと言われたって、やっぱり怖いでしょう？と思うのは、「罪と死」です。キリスト者になって、自分は罪の支配から本当に離れているのか？と悩むかもしれません。また、すべての人が確実に死んでおり、自分も死ぬこととなります。キリストを信じる者は、キリストがよみがえられたように、自分もよみがえる、いのちを持つと信じています。けれども、やはり死んでしまうじゃないか？と不安がよぎ

ります。罪と死の支配というのが、あまりにも強烈で、自分自身が信仰によって義と認められたということに大きな挑戦を投げかけてくるのです。

そこでパウロは、真正面からこの問題に取り組みます。その解決を見るのは、実は 8 章の最後で、「8:37 これらすべてにおいても、私たちを愛してくださった方によって、私たちは圧倒的な勝利者です。」と彼は宣言します。圧倒的に罪と死に勝利していることを示すために、そもそも、罪と死はどこから始まったのか？という起源を語っていきます。そう、最初の人アダムです。アダムが罪を犯したので、その後、罪が人々に入り込み、死も広がって行きました。

## **1A 死の支配 12-14**

### **1B 罪による死 12**

<sup>12</sup> こういうわけで、ちょうど一人の人によって罪が世界に入り、罪によって死が入り、こうして、すべての人が罪を犯したので、死がすべての人に広がったのと同様に――

パウロは、「すべての人が罪を犯して、神の栄光を受けることができず」と言っていました(3:23)。罪はすべての人々が犯しているというほど、広がっていて、すべての人が罪の下にいますと言っていました。罪の影響下から離れて生きている人は一人としていないと言っていたのです。どのようにして、そこまで広がっているのか？その元をたどると、一人の人アダムにたどり着くのです。神によって初めに造られた人が、実に初めに罪を犯した人なのです。エデンの園には、多くの木があり、実が結ばれていて、どこから取って食べてよいと神は言われていました。園の中央には、いのちの木があり、そこから実をとって食べてよいのです。ただ、善悪の知識の木からの実は食べてはいけなと言われました。それは、神の領域であり、善悪は神の知るところであり、人が善悪を知るのは、神のいのちにあずかっているからです。そして、「その木から食べる時、あなたは必ず死ぬ。」と警告されていました(創世 2:17)。

そして、アダムがそれを食べ、罪を犯しました。そこで、アダムは神が近づいても、自分の身を隠すようになりました。そう、死ぬというのは、必ずしも肉体の死を意味していません。神との断絶、神との結びつきにある、神のいのちの流れがなくなってしまったことです。そうした霊的な死があり、そして肉体の死もあります。「あなたは土地のちりだから、土のちりに帰るのだ。」と神は宣言されました(3:19)。そういうことで、パウロはここで、「ちょうど一人の人によって罪が世界に入り、罪によって死が入り」と言っています。

もっと生々しく感じ取るなら、ちょうどこれは新型コロナウイルスに例えることができるでしょう。これを武漢ウイルスと呼ぶべきだ、中国ウイルスと呼ぶべきだとし、また、世界中で武漢のどこから発生したのか？という発生源の議論がありました。いずれにしても、ごく一都市のどこかで始まったものが、ここまで世界を苦しめるとは思っていませんでしたね。コロナ禍は日々の脅威です。しかし

今、新しい形のワクチンが世界に広がっています。イスラエルを皮切りに、全国的に接種すると感染者が激減しています。今ワクチンがどれだけ普及するか？ということが最も大きな焦点です。

霊的には、罪と死の発生の経路は明白です。それは、すべてアダムが犯した罪です。彼の罪によって、すべての人に罪が行き渡り、すべての人に死が広がりました。そして、罪と死に対して、それを打ち消す決め手が何なのかも明白です。キリストが行われた義によって、その罪のために死に、死に打ち勝ちよみがえられたところ、このたった一つの義の行いによって、信じるすべての人に義が行き渡り、またいのちが広がりました。

## 2B 律法より前の死 13-14

<sup>13</sup> 実に、律法が与えられる以前にも、罪は世にあったのですが、律法がなければ罪は罪として認められないのです。<sup>14</sup> けれども死は、アダムからモーセまでの間も、アダムの違反と同じようには罪を犯さなかった人々さえも、支配しました。アダムは来たるべき方のひな型です。

神が、これこれをしなさい、あるいは、これをしてはいけないという律法があります。律法は、紀元前 15 世紀に生きていたモーセを通して、神がイスラエルの民に授けられました。そのモーセの律法によって、例えば、「偽りの証言をしてはいけない」と明らかにされたから、罪は罪としてみなされるのです。けれども、モーセよりもはるか昔、アダムの時からすでに人々は死んでいました。創世記 5 章には、アダムからノアまでの系図がありますが、900 歳以上の人たちも多くいて、驚くほどの長寿です。しかし、「死んだ」という言葉で一人ひとりが終わっています。彼らにまだ律法が入っていないなくても、すでに死が入っていたということは、罪がすでにあったことを証明しています。

ですから、律法を犯したから罪が存在して、罪を犯して死ぬのではなく、もともと罪があって、それが律法によって明らかにされたのです。自分が無垢な状態であって、そこで罪を犯して初めて罪人になるのではなく、そもそも罪が自分の内にある、それで罪の行為に至るのです。ダビデは、バテシエバと姦淫の罪を犯し、その夫ウリヤを殺す罪を犯して、その罪を告白する時に、「私の罪は、いつも私の目の前にあります。」とまで言いました。そして、「ご覧ください。私は咎ある者として生まれ、罪ある者として、母は私を身ごもりました。」とまで言っています(詩篇 51:5)。自分の内にある、それは生まれる時から既に持っていたものという、罪そのものの根深さを悟ったのです。そういった性質や傾向があったからこそ、やってはいけないことをやってしまった、と悟りました。

ここまで罪の支配が広がり、死が広がっています。けれども、パウロは希望を述べます。「アダムは来たるべき方のひな型」というのです。来るべき方とは、イエス・キリストのことです。ひな型というのは、何かを指し示す模型みたいなものですね。子どもたちがおままごとをしていたら、それは実際のお父さんとお母さん、夫婦の会話を映し出しています。同じように、アダムの違反によって罪が世界に入り、死が全ての人に及んだというのは、キリストの働きを指し示しているのだとい

うことです。キリストは「第二のアダム」とも呼ばれています。

## 2A キリストの雛型 15-21

けれども、アダムがキリストを指し示していると言われても、全く違いますよね？パウロは初めに、アダムとキリストが違い、その対比を行っていきます。

### 1B 違う点 15-17

#### 1C 違反と賜物 15

<sup>15</sup> しかし、恵みの賜物は違反の場合と違います。もし一人の違反によって多くの人が死んだのなら、神の恵みと、一人の人イエス・キリストの恵みによる賜物は、なおいっそう、多くの人に満ちあふれるのです。

アダムとキリストの違いは、第一に「違反と恵みの賜物」です。違反とは、神の命令に逆らうことを行ったことです。アダムが神に命じられたことに違反したので、多くの人が死ぬこととなりました。けれども、イエス・キリストにおいては「恵みによる賜物」です。私たちにできなくなっていることを、神がこの方において代わりに行ってくださいました。これは、賜物、つまり贈り物です。そして、どんなにアダムの影響が大きかったとしても、こちらの恵みは人々に満ち溢れるのです。

ここで大事な言葉は、「なおいっそう」です。罪と死の支配というものが、この恵みによって呑み込まれると言ったらいいでしょうか。罪と死というものは強烈な現実ですね。けれども、神の恵みは、その現実を呑み込むほど力強く、勢いがあります。

私たちは心のどこかで、いかに罪と神の恵みは拮抗していると思っています。自分の罪と、神の恵みはどちらが重いのか？となくなってしまっています。いいえ、そういうものではありません。ランプをしているとしましょう。相手と神経戦になっています。どんどん、罪というカードを自分に突き付けてきます。しかし、イエス・キリストにある恵みの賜物というジョーカー1枚を私は持っています。それを出しました。すると、その罪と呼ばれているカードが、裏返されて、恵みに変わっていくのです！どれだけ、義のカードを自分の手のうちに持っているか？ではないのです。そうではなく、そのジョーカーによって、相手が突き付けてきた、数々の罪のカードそのものが、自分にとって有利に働くのです。恵みというカードに変えられてしまうのです。

#### 2C 不義と義認 16

<sup>16</sup> また賜物は、一人の人が罪を犯した結果とは違います。さばきの場合は、一つの違反から不義に定められましたが、恵みの場合は、多くの違反が義と認められるからです。

アダムとキリストの次の違いは、「不義と義認」です。アダムが犯した罪は、善悪の知識の木の

実がありますね。その一つの違反によって、不義に定められました。けれども、恵みはその反対です。どんなに不義を行ってきたとしても、信仰によって義と認められます。全く罪を犯したことのないうちにみなされるのです。

私たちはとかく、罪についても、義についても量として考えてしまいます。罪については、「この罪は犯しているが、他は正しく生きているから大丈夫だろう。」と考えてしまいます。しかし、罪というのは、神との関係の中で起こったことであり、一つの罪でその関係が損なわれるのです。「ヤコブ 2:10 律法全体を守っても、一つの点で過ちを犯すなら、その人はすべてについて責任を問われるからです。」夫婦の関係において、夫が不倫をしたとします。けれども、そのことを問い詰められたら、「俺がどれだけ、お前に尽くして来たか分かっているのか！」と言ったところで、その不倫をしたという裏切りがあるのですから、他の行った良いことは関係ないことなのです。

けれども、恵みの賜物については異なります。その逆といってもいいでしょう。自分がこれまで、数えきれないほどの罪を犯してきました。けれども、悔い改めて戻って来ます。すると、これまでのことは一切、問われないのです！なぜなら、神は赦しの神であり、恵みに富んでおられるからです。ここでも私たちが量的に考えてしまいます。自分は、悔い改めた。けれども、まだまだ償わなければいけない罪がある。神に完全に赦していただくには、いろいろまだやっていないといけない。どうですか？赦す時に、完全に赦さないと赦しになりません。「これを赦してくれ！」といって、「いいですよ、赦します。けれども、まだこれは残っていますからね。」と言ったら、相手は赦されていると思うのでしょうか？量ではないのです、質なのです。関係ですから。ですから、多くの違反が義と認められます。

### 3C 死といのち 17

<sup>17</sup> もし一人の違反により、一人によって死が支配するようになったのなら、なおさらのこと、恵みと義の賜物をあふれるばかり受けている人たちは、一人の人イエス・キリストにより、いのちにあつて支配するようになるのです。

三つ目のアダムとキリストの違いは、「死といのち」です。アダムという一人の違反によって、すべての人が死ななければならないというほど死が支配してしまいました。しかし、恵みによって、信仰を通して人々が義と認められます。義の賜物が与えられます。そのことによって、イエス・キリストにあるいのち、神のいのちが支配するようになるのです。

私たちはみな、死にます。こんなこと当たり前だと思うのですが、どこかでそう思っていないのです。原発事故の後、しばらくの間、放射能の影響について、放射線専門の大学教授の方の講義を聞きました。放射能について死ぬかもしれないという恐れが蔓延していましたが、彼は、死ぬ確率としては、癌のほうがはるかに高いことを話しました。そしてこう尋ねました。「日本では癌で死ぬ

人が人口の 50%以上です。」そういつてから、「今、おそらく隣の人が癌にかかるかもしれないと思っても、自分だと思わなかったでしょう。」と言われるのです。五割以上、死ぬかもしれないのに、それでも、自分は生きていていると思っているのです。

けれども、死のことが考えられないというのは、裏返すと、ずっと生きていたいと思っているのです。私たちキリスト者が、復活の希望について話すと、そんなことは滑稽だとします。けれども、では本音はそうであってほしいと願っているのです。それもそのはず、聖書は、人は元々、死ぬようには造られていないからです。永遠に生きるように神は造られていることを意図しておられました。ですから、人が死ぬというのは正常ではなく異常であり、それこそ緊急事態なのです！

ここで、「恵みと義の賜物をあふれるばかり受けている人たち」とありますね。神の恵み、イエス・キリストの恵みが満ちあふれます。それは、今までの罪が帳消しにされて、あたかも罪を犯していないようにみなされ、キリストの義が賜物として私たちに与えられるからです。大事なのは「あふれる」ということばなんですね。ちょうどいい按配で与えられるわけではありません。自分の中に抑えることができず、あふれるほど豊かに与えられるということです。

死のことが考えられない以上に、復活のことが考えられないかもしれません。本当に私を永遠のいのちに至るためによみがえらせていただけるのか？と思うでしょう。自分はまだまだよくできていないから、だから、天国と地獄の中間あたり、煉獄に行くのかな？とか考えてしまうかもしれません。けれども、すべての人が死ぬのが現実であるのを知っていれば、イエス様が、「わたしを信じる者は死んでも生きる」というのはもっと現実なのです！確かな希望です。

ここで「支配」という言葉をパウロは使っていますね。パウロは、3 章 9 節で「罪の下」という言葉を使っていました。これも支配です。つまり、アダムを頭とする、罪と死の支配の世界があります。アダムの子孫であるかぎり、人はその支配から免れることはできません。そして、「イエス・キリストにより、いのちにあって支配する」という世界もあるのです。ここではイエス・キリストが頭です。アダムにある者か、あるいはキリストにある者か、どちらかの支配に私たち人間は生きています。アダムの支配から徐々に動いて、キリストの支配に行こうとしている。私は中間なのだ！ということはないのです！

ここで再び、「なおさらのこと」とパウロは言っています。私たちは罪と死の支配の中で圧倒されてしまうかもしれません。けれども、恵みと義の賜物が溢れている中で、なおのこと、イエス・キリストにあっていのちによって支配するということです。

## 2B 同様の点 18-19

ここまでは対比でした。パウロは、アダムとイエス様の同様の点、共通点を指し示していきます。

### 1C 一人の行為 18

<sup>18</sup> こういうわけで、ちょうど一人の違反によってすべての人が不義に定められたのと同様に、一人の義の行為によってすべての人が義と認められ、いのちを与えられます。

アダムとイエス様、それぞれが「一人」の行為だということです。アダムの違反によって多くの人が不義に定められました。同じように、イエス様の義の行為によって、つまり十字架における行為によって、この方を信じるすべての人が義と認められ、いのちが与えられます。神のいのち、霊的ないのちが与えられ、よみがえりのいのちも与えられます。自分が救われるのは、イエスがいて、また他の人がいて、あるいは後から出て来た聖人がいて、それで自分が救われるのではありません。アダムが一人で違反したことがすべての不義に影響を与えたように、たった一人のこの方の義の行為が、すべての信じる者たちを義と認め、いのちを与える力を持っているのです。

### 2C 多くの人 19

<sup>19</sup> すなわち、ちょうど一人の人の不従順によって多くの人が罪人とされたのと同様に、一人の従順によって多くの人が義人とされるのです。

ここでの類似点は、「多くの人」です。一人の不従順が多くの人を罪人にしました。それと同じように、イエス様の父なる神への従順、十字架に至るまでの従順が、多くの人を義人にするのです。どうでしょうか、私たちはある人々が義人とされるということであれば、そうだそうだ、と思うでしょう。立派な生き方をしている人々は多くいます。けれども、ここでの「多くの人」というのは、自分たちが考えることのできない多くの人ということです。まさか、この人が！という人も義人とされているということです。自分が嫌いだった人、いや相手も嫌いだったかもしれませんが、天国で二人が実はいて、「え、こいつが！」と思うかもしれません！

### 3A 増し加わり 20-21

#### 1B 罪に対する恵み 20

<sup>20</sup> 律法が入って来たのは、違反が増し加わるためでした。しかし、罪の増し加わるところに、恵みも満ちあふれました。

罪が世にあって、律法によってその罪が明らかにされました。違反によって、ますます罪が明らかになり、増し加わって行きました。けれども、そのようにして罪が明らかにされて、罪が増し加わっていくところに、まさに恵みが満ちあふれるのです。これが、いわば先ほど喩えた、トランプで遊んでいるところの「ジョーカー」でしょう。これまで、圧倒的に勝っていた人が、相手が一枚のジョーカーを出して、なんとすべてのカードが裏返されて、相手のものになってしまうというものです。罪が恵みに呑み込まれてしまいます。圧倒的な勝利です。

私たちが罪を打ち消すために、善い行いをしていくとします。けれども、やってもやっても無理です。アダムの違反によって、罪はすでに広がっているのです。私たちは罪の下にいます。そこから免れることはできないのです。しかし、恵みの下にいれば、すべてが逆転します。あらゆる罪は赦されます。そして信仰によって神の前で義と認められます。罪が増し加わるほど、恵みが満ちあふれます。

## 2B 死に対する命 21

<sup>21</sup> それは、罪が死によって支配したように、恵みもまた義によって支配して、私たちの主イエス・キリストにより永遠のいのちに導くためなのです。

こうして、いかに罪が支配しているかを認めると共に、同じように恵みも支配しているのです。多くの不義が義と認められ、恵みが満ち溢れ、それで義と認められた者には、主イエス・キリストにある永遠のいのちが約束されているのです。

ここから見てくるのは、私たちがどちら側についているのか？ということです。次回、6章でそのことを学びます。世界が、アダムを頭とする家族にいるのか、キリストを頭とする家族にいるのか、ということになります。アダムにあって、すべての人が罪人で、すべての人が死にます。キリストにあって、すべての人が義と認められ、すべての人が生きます。どちらかの家族に人は属しているということです。自分はアダムについているのか？それともキリストについているのか？もし、キリストについているのなら、恵みの下にいますのであり、罪に対しては死んでいるのです。そうみなさないといけません。その「みなしていく」ということを学びます。

ですから、5章の後半は難しいのですが、とても大事なところになります。服をハンガーにかける、ハンガー掛けのような存在です。このハンガー掛けがあって、他の全ての服がつるされています。一人の人によるアダムによる影響は計り知れないです。けれども、キリストはなお一層のこと、恵みをもって影響力を行使しておられます。自分の行いではなく、どちらにいるのか？ということで、すべてが決まってきます。